

吉良氏の歴史

東上空から見た八ツ面山。中腹には久麻久神社が鎮座する。

吉良荘という荘園名の由来は八ツ面山で雲母（うんも）が採れたことに因^{ちな}むといわれます。雲母は別名「きらら」といい、ここから荘園名の「吉良」に結びついたようです。荘域は現西尾市域とほぼ重なり、かつては旧幡豆郡とほぼ同じ意味として「吉良」が用いられていました。

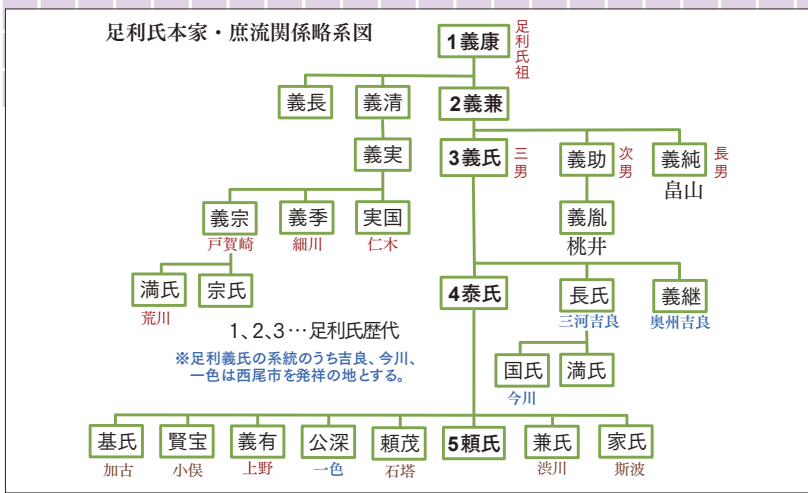
2021年は吉良氏が西尾へ進出するきっかけとなった承久の乱（1221年）から800年を迎えます。



吉良荘地図

※足利長氏の系統が足利から吉良に名乗りを変えるのは、足利尊氏が征夷大將軍になった1338年から1343年までの間のことですが、本書（引用文以外）ではおおむね鎌倉時代までを「足利」、解説の都合上1331年の元弘の乱以降は「吉良」として表記します。

※写真掲載した市内の史跡等には通し番号を付記し、その番号を103・104ページの案内地図に示しました。



④ 足利義氏画像 鏝阿寺蔵
 鏝阿寺は栃木県足利市にある足利氏の菩提寺です。

足利氏の三河、そして西尾進出 吉良氏 800 年の序章

承久の乱と 足利義氏

1219 年に鎌倉幕府第 3 代将軍源実朝が殺害されると、しだいに朝廷と幕府の仲が悪くなり、1221 年には朝廷の最有力者後鳥羽上皇が鎌倉幕府を倒そうとした戦い、承久の乱が起きました。この戦いはわずかひと月ほどで幕府側の大勝利に終わり、武士が本格的に全国を支配する時代がおとずれました。

幕府は鎌倉と京都を結ぶ重要な三河の地に有力御家人足利氏を配置します。戦功を挙げた恩賞として三河国守護と額田郡(岡崎市、幸田町)、碧海荘(豊田市南部、岡崎市西南部)、吉良荘(西尾市等)の地頭が足利義氏に与えられました。やがて吉良荘を本拠とした義氏の子孫は「吉良」という名字を名乗ることになります。

足利義氏は足利義兼の三男として生まれましたが、母親が尼将軍北条政子の妹という血筋から足利氏の家督を継ぐことになりました。足利氏の三河進出により、吉良氏をはじめ仁木、細川(以上岡崎市)、今川、一色など三河の地名を名字とする足利一門の多くが三河の地で誕生することになります。



① 西尾城址の碑 (錦城町)
 西尾城本丸跡に建っています。

西尾城創建伝説

西尾城の創建についてはいろいろな説がありますが、足利義氏が鎌倉時代の承久の乱で活躍したことにより三河国守護・吉良荘地頭に任じられ、西尾城の前身である西条城を築いたのがはじまりと伝えられています。江戸時代の歴代西尾城主もそういう認識をもっていました。しかし、西尾城跡からは鎌倉時代の遺構は確認されていません。現在の西尾城跡とは別の場所に築かれた可能性もあります。

戦国時代の1513年頃、それまで京都で活動していた吉良氏は吉良荘に生活の拠点を移しますが、その時期に西尾城を築城したとの説があります。今後、西尾城本丸跡の詳しい発掘調査が行われたら、創建に関わることがわかるかもしれません。



② 鶴ヶ崎天満宮 (鶴ヶ崎町)



③ 本成大姉の墓 長寿尼寺跡 (巨海町)

吉良荘を継承した足利長氏

『今川家譜』という今川氏の歴史をまとめた書物には、足利長氏は足利義氏の長男でありましたが、母親の家柄の違いで後継ぎにはなれず、鎌倉幕府の執権北条泰時の娘を母とする弟の泰氏が足利氏の家督を継ぎ、長氏は吉良・今川氏の祖となったと記されています。足利氏では母親の家柄が後継ぎ選びで重視され、足利氏は北条氏と親戚になることで幕府内の地位を保っていました。なお、長氏の読みについては、吉良氏菩提寺の実相寺（上町）では、代々「おさうじ」と読み伝えられています。

長氏は足利氏本家の家督の代わりに吉良荘を継承しました。その後、長氏は吉良荘の本所（領主）である九条家出身の將軍藤原（九条）頼経と密接な関係をもっていたため、將軍の交代とともに失脚したといわれています。西尾市内には長氏が1251年に建立したと伝えられる鶴ヶ崎天満宮（鶴ヶ崎町）があります。また、長氏の妻は本成大姉とい長寿尼寺跡（巨海町）には、その墓といわれる立派な石塔が残っています。

御 剣 八 幡 宮 と 髭 切



④ 御剣八幡宮 (錦城町)

西尾城の本丸に建つ御剣八幡宮は、足利義氏が城内を守るために祀ったといわれる神社で、伯母の北条政子から授かった源氏に代々伝わる名刀「髭切」を納め御神体としたと伝えられています。また、長男ながら足利氏の家督を継ぐことができなかった長氏を哀れみ、足利義氏が長氏に「髭切」を密かに渡したともいわれます。

「髭切」とは平安時代に清和源氏の始祖源満仲が異国人に作らせたもので、その切れ味を試したところ髭まで切れたことが名前の由来とされます。源頼朝が所有していた「髭切」は平清盛から後白河法皇に渡り、1190年に頼朝が後白河法皇に会ったときに、この「髭切」と再会して涙を流したと伝えられています。



⑤ 聖一国師の碑 実相寺（上町）



⑥ 応通禅師の墓（上町）

三河臨濟禅の発展と吉良氏

実相寺を創建した足利満氏

足利満氏（長氏の子）は1271年に東福寺（京都市）の円爾（聖一国師）を招き、吉良氏の菩提寺となる三河最古の臨濟宗寺院実相寺（上町）を創建しました。このことは、この地域の臨濟宗の起りであり、吉良氏の発展とともに三河地方に多くの臨濟宗寺院が建つきっかけになりました。円爾は実相寺を開きましたが、それは一日だけお寺にとどまったものであり、実際には円爾の弟子無外爾然（応通禅師）が実相寺の初代住職として寺の発展に尽力しました。なお、円爾はこの地方に初めて抹茶をもたらしたといわれています。有名な円爾を招くことができたのは東福寺を保護する九条家が吉良荘の本所（領主）であったことに関係があると思われます。

実相寺は1560年に織田方の兵火により焼失したといわれています。また、それより以前の南北朝時代にも戦火をうけ焼失したともいわれ、当初の実相寺は応通禅師の墓近くにある金石神社（上町）付近や浄念塚（鶴城町）付近にあったという説もあります。



⑦ 実相寺全景（上町）

鎌倉時代に建てられた当時の実相寺の規模は不明ですが、実相寺の塔頭（寺院の敷地内にある小寺）として知られる道興寺跡は現境内地の東方300メートル、竜門寺跡は同じく南へ400メートル、法光寺は同じく500メートルほど離れており、昔の実相寺境内の広さをうかがうことができます。



⑧今川氏発祥の地（今川町）市指定史跡



⑨願成寺（巨海町）臨濟宗妙心寺派

霜月騒動と吉良氏

霜月騒動とは1285年の11月（霜月）17日に第9代執権北条貞時の母の兄（養父）で有力御家人安達泰盛と、貞時の乳母の夫で御内人（北条得宗という本家の家臣）の平頼綱が争い、泰盛とその一族及びその仲間たちが倒された政変です。霜月騒動の背景には元寇（蒙古襲来）という鎌倉幕府にとっての大事件がありました。元寇に駆り出された武士たちは恩賞がもらえず苦しんでおり、安達氏たちは幕政改革に取り組みましたが、平頼綱をはじめとする北条氏一派と対立し、滅ぼされました。そして、北条氏の独裁体制が確立していきます。

霜月騒動で倒された者のなかには「足利上総三郎」がおり、これを足利（吉良）満氏とする説がありますが、満氏は騒動の前年、第8代執権北条時宗の死去と同時に出家しており、「足利上総入道」などとよばれたはずで、倒されたのは満氏の当初の後継ぎであった貞氏と思われます。満氏がいつ死去したかは不明ですが、1331年に願成寺（巨海町）を満氏が創建したと伝えられています。霜月騒動により吉良氏は一時衰えました。

今川氏と一色氏の発祥



⑩一色氏発祥之地の碑（一色町一色）

足利長氏の二男を国氏といい、吉良荘内の今川の地をあたえられたことから「今川」を名乗ります。ゆえに今川氏は吉良氏の分家になります。『今川記』には「室町殿御子孫たへなば吉良につがせ、吉良もたへなば今川につがせよ」と書かれ、今川氏は吉良氏に次いで室町幕府將軍家を継承できる家と認識されており、守護大名、戦国大名として活躍しました。西尾中学校の校庭の南側には市史跡今川氏発祥の地があります。

足利義氏の後継は長男とされる長氏ではなく、弟の泰氏でした。一色氏は泰氏の子公深が吉良荘西条の一色に屋敷を構え、「一色」を名乗ったのがはじまりとされています。一色氏は室町幕府の侍所頭人（京都の治安維持に当たる長官）を務める四職の一人に名を連ねています。



① 鎌倉街道と八橋伝説地（知立市八橋町）
1333年、足利軍は八橋で軍議を開き鎌倉幕府離脱を決定しました。



② 八橋伝説地の碑（知立市八橋町）
八橋伝説地は県指定名勝です。

鎌倉幕府滅亡の舞台裏

倒幕を後押しした吉良貞義

1285年の11月（霜月）に起きた霜月騒動により吉良氏を含む足利氏一族は一時衰えました。しかし、それは打倒北条氏を目指すはじまりでもありました。足利（吉良）満氏の当初の後継ぎである貞氏は霜月騒動のとき、安達氏とともに殺されたため、弟の貞義が吉良氏を継ぐこととなります。

後醍醐天皇は、1331年に倒幕のため挙兵します。その知らせを受けた鎌倉幕府は、すぐに討伐軍を向かわせませんが、その中には吉良貞家（足利長氏の兄弟の子孫）と吉良満義（貞義の子）の名がみえます（下記資料参照）。三河の武士を引き連れています、当時の足利氏の軍勢は三河武士を主力とし、その中心が吉良氏でした。

鎌倉幕府の一員として活動していた足利高氏（のち尊氏）は1333年、後醍醐天皇の求めに応じて京都の幕府拠点である六波羅探題を攻め落とし、北条一門を滅ぼすことに大きな役割を果たしました。鎌倉幕府を倒すにあたり、高氏は三河の八橋（知立市）で軍議を開きます。今川了俊が書いた『難太平記』によれば、まず吉良貞義に相談して支

持を得た後、一族・家臣にも倒幕を諮ったとされます。この謀反は一族で重きを成す吉良氏の賛同が必須であったと考えられます。その後、関東では新田義貞に続き足利千寿王（高氏の子・のちの義詮）が挙兵し、北条高時以下の一族が自害し、幕府は滅びました。

大將軍	大仏（北条）貞直 遠江国	金沢貞冬 伊勢国
名越（北条）宗教 尾張国	北条政高か 美濃国	吉良貞家か 三河国
北条氏 讃岐国	吉良満義 千葉貞胤 一族・伊賀国	宇都宮貞宗 伊予国
長沼秀行 淡路国	小山秀朝か 阿波国	小笠原貞宗 一族
加地（佐々木）氏 備前国	結城親光か 一族	宇佐美氏 一族
北条仲時 信濃国	小笠原貞宗 一族	安保氏 一族
武田政義 一族・甲斐国	高坂氏 一族	河越氏 一族
伊東氏 一族	佐々木清高	佐々木氏
薩摩氏 一族	佐々木清高	佐々木導管
淡谷氏 一族	千葉氏	
三浦氏 一族	勢多橋警護	
佐々木定氏	佐々木導管	
条々	元弘元年八月	

○吉良貞家は足利尊氏の誤りとする説もあります。

④ 資料 1331年 鎌倉幕府上洛軍勢交名「光明寺残篇」より作成



④ 管崎宮楼門（福岡市東区）重要文化財
管崎宮は管崎八幡宮ともよばれ、日本三大八幡宮のひとつともいわれます。



④ 湊川神社（神戸市中央区）
湊川神社は湊川古戦場跡に建立されました。

足利尊氏を
支えた吉良氏

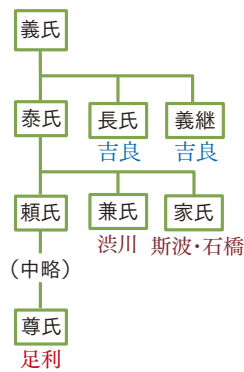
1333年に鎌倉幕府が滅亡すると、後醍醐天皇が建武の新政を開始し、足利高氏は天皇の名「尊治」の一字を拝領して尊氏と名乗ります。しかし、すぐに後醍醐天皇と足利尊氏の関係は決裂しました。

1335年、尊氏は鎌倉で起きた北条氏残党による中先代の乱を鎮めるため出陣しました。尊氏は乱を鎮めて鎌倉を奪回すると、天皇の命令に背いて京都に帰還せず、朝敵とされると、鎌倉で軍勢を集め京都を目指します。このとき吉良氏は尊氏と行動を共にしました。1336年になると、天皇方との戦いに京都で敗れ、尊氏は吉良貞義らと九州に逃れることとなります。このとき、尊氏は戦勝祈願で訪れた管崎宮（福岡市東区）に貞義が進上した太刀を奉納しています。

やがて軍勢を立て直した尊氏軍は4月に九州を発ち、翌5月25日、湊川の戦いで楠正成と新田義貞を破り京都に入り、11月には17か条の法令建武式目を制定し、新しい政権が誕生しますが、常に吉良氏は尊氏を支えていました。

足利氏から吉良氏へ

吉良氏関係略系図



吉良氏の祖足利長氏は、江戸幕府が編纂した『寛政重修諸家譜』という大名・旗本の家譜集によれば、1290年に80歳で死去と記されています。逆算すると1211年の生まれです。長氏以後、満氏、貞義、満義の名字は「吉良」ではなく「足利」でありました。分家になると名字を変えるのが習わしでしたが、吉良氏と同様に足利氏から分かれた斯波氏、渋川氏も「足利」名字のままで、各氏とも足利本家の兄の流れでありました。

それでは、吉良氏はいつから「吉良」に名字を変えたのか。これには足利尊氏が1338年に征夷大將軍に任じられ、將軍の後継ぎを足利本家（將軍家）に限った可能性が指摘されています。1343年に「吉良」という名乗りが当時の史料で確認できるため、その間の出来事でしょう。



⑩ 足利尊氏石宝塔 八剣神社（岡崎市大門）
岡崎市指定文化財



⑪ 康全寺（満全町）曹洞宗
吉良満貞の妻が開基にかかわっています。

足利将軍家と対立

観応の擾乱と吉良氏

観応の擾乱とは、室町幕府内部の争いで、足利尊氏の執事高師直と尊氏の弟足利直義が幕政の主導権を争った権力抗争です。1349年に師直が勝利を収め、直義は失脚しますが、翌年には直義が反撃に転じます。

吉良満義（真義の子）は、直義の妻が男子を出産した際に京都の自分の屋敷を産所として提供し、また直義の命令で、退位した天皇の邸宅の警固をするなど、直義と親しい関係にみえました。しかし、観応の擾乱が始まると、吉良満貞（満義の子）は直義と行動を共にしますが、満義は自宅を尊氏の陣所に提供するなど、尊氏・師直の側につきました。満義は死去する1356年まで、尊氏（幕府・北朝）に従っていたのです。

1351年2月、直義派の勢力により尊氏、師直たちは窮地に陥り、師直をはじめとする高一族はことごとく殺害されました。しかし、1351年後半になると直義たちは劣勢となり、翌1352年2月26日、直義は鎌倉で死去します。直義という拠り所を失った満貞でしたが、今度は南朝に属して尊氏と敵対しました。そして、南朝から左馬頭という名誉ある官職に任じられます。左馬頭とは源氏の棟梁であり関東の支配者、そして将軍に成るものの称号でした。いかに南朝が満貞に期待を寄せたかがうかがえます。ただし、このとき幕府に逆らった行動が、後に吉良氏が守護大名・戦国大名として発展しなかった要因になったと思われる。

観応の擾乱前夜（1349年8月）における敵対関係

◇足利直義（三条殿）派

石塔義房、上杉重能、上杉朝房、畠山直宗、石橋和義、南宗継、大高重成、島津光久、曾我師助、饗庭尊宣（命鶴丸）、梶原景広、須賀清秀、斎藤利泰 兵力三千騎あまり

◇高師直（執事）派

仁木頼章、仁木義長、仁木頼勝、細川清氏、細川頼春、吉良満義、山名時氏、今川頼貞、千葉貞胤、宇都宮貞宗、宇都宮蓮智、土岐頼康、佐々木導誉、佐々木六角氏頼、武田信武、小笠原政長、戸次頼時、荒尾、土肥、多田院の御家人、常陸平氏、甲斐源氏、高一族 兵力5万騎超

※『太平記』西源院本 第27巻「師直将軍の屋形を打ち囲む事」より作成



⑫実相寺釈迦三尊像（上町） 県指定文化財



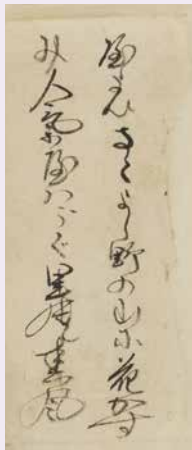
⑬東条吉良氏墓所 花岳寺（吉良町岡山）

東条吉良氏の 分立

1221年に起こった承久の乱の後、足利義氏は吉良荘に進出しますが、当時の吉良荘は西条と東条に分かれていました。そして、義氏は吉良荘西条の現在の西尾城の地に西条城を築いて長男長氏に、吉良荘東条に東条城を築いて三男義継にそれぞれ守らせた

と伝えられます。この義継が東条吉良氏の祖ともいわれますが、このことを実証するものはありません。義継については、史料がほとんどなく、その足跡については伝説の域を出ません。義継の系統は、長氏流の吉良氏とは別に、もう一流の吉良氏（奥州・武蔵吉良氏）を形成しますが、この系統の存在がはっきりしてくるのは南北朝期、奥州管領になった吉良貞家からです。

一般に東条吉良氏とは、観応の擾乱以降も南朝に従属して幕府（北朝）に帰順しない吉良満貞を見限り、満貞の弟義貴を立てて起こした新たな一家を指します。満貞と義貴は合戦にも及んだようですが、話し合いの結果、義貴が吉良荘東条を相続したことが、『今川記』という歴史書に書かれています。



①釈迦像胎内にあった和歌

和歌
「やよひきてよし野の山に花かすみ
人気やはらぐ里の春風」

実相寺釈迦三尊像と吉良満貞

吉良氏菩提寺実相寺の釈迦堂（県指定文化財）には、吉良満貞が1362年に造立した釈迦三尊像（県指定文化財）が安置されています。満貞は將軍足利尊氏と敵対する中で、父満義の死後、吉良家当主の座をめぐって、弟義貴（東条吉良氏）と争いました。將軍足利尊氏と敵対してきた満貞は、尊氏死後の1360年頃に幕府へ帰参します。そして、父満義の七回忌に釈迦三尊像を菩提寺に納め、自分が吉良氏の正当な当主であるということを示しました。

満貞が造立した本尊の胎内には和歌が書かれた紙が入っていましたが、これはかつて味方した南朝の本拠地・吉野の情景を満貞が詠んだものともいわれます。



⑭ 竜門寺跡（上町）
吉良俊氏の法名は竜門寺殿といい、竜門寺の創立にかかわっています。



⑮ 今川了俊の供養塔 今川氏発祥の地（今川町）

室町幕政に貢献

吉良俊氏と 今川了俊

室町幕府は鎌倉幕府にならい、御家人の所領争い等の訴訟を取り扱う引付という機関を設置しました。引付の長官を引付頭人といい、吉良氏では貞家、満義、満貞、そして俊氏がこの地位に就きました。俊氏は1391年から引付頭人としての活動がみえます。

翌1392年には南北朝の合一が実現し、この頃には室町幕府は政治的に安定した時期を迎えます。その後、引付は廃止となりましたが、1399年、俊氏は将軍足利義満が有力守護大内義弘を征伐した応永の乱に従軍しています。なお、俊氏は今川了俊の娘を妻としています。

今川了俊は実名を貞世といい、父今川範国より遠江国（静岡県西部）守護を譲り受け、朝廷警固の責任者である侍所頭人や引付頭人を務めます。そして、1370年に南朝軍の拠点である九州を平定するために九州探題に任じられ、備後国（岡山県西部、広島県東部）、安芸国（広島県）や九州の多くの国の守護を兼務します。以後25年もの間、南朝勢力と戦い九州を制圧し、幕政の安定に貢献しました。

今川了俊の活躍



① 『今川状』 西尾市岩瀬文庫蔵

今川了俊は優秀な武士であり、また文化人としても有能でした。24歳のときの和歌一首が、光厳天皇の命で作られた『風雅和歌集』に入選したり、吉田兼好の名作『徒然草』の編集にも携わっています。また、九州太宰府に赴くとき、行程や風景、和歌などを記した紀行文として『道ゆきぶり』を書いています。晩年の了俊は文化人として活躍しました。77歳のとき、子孫への歴史の証言書『難太平記』を著したのははじめ、和歌に関する『二言抄』、『言塵集』など数々の作品を残しています。江戸時代には、全国の寺子屋などが了俊の書いた手紙を基にした『今川状』、『女今川』などを教科書として大ベストセラーとなったため、今川了俊の名声は全国にとどりました。



↑ 賀久留神社本殿（浜松市西区）



↑ 鴨江寺観音堂（浜松市中区）高野山真言宗

浜松で活動した吉良義尚

吉良氏は本領吉良荘のほか、今の静岡県浜松市の主要部分を占める広大な浜松荘を領有していました。吉良氏と浜松荘の関係が明らかになるのは南北朝時代初期の吉良貞義の時代です。足利氏の内紛である観応の擾乱の際に一時室町幕府に没収されますが、

代々の吉良氏当主は、浜松荘内の有力寺院であった鴨江寺（浜松市中区）の規則を定めています。このことは、吉良氏が浜松荘の支配者であるという証になります。

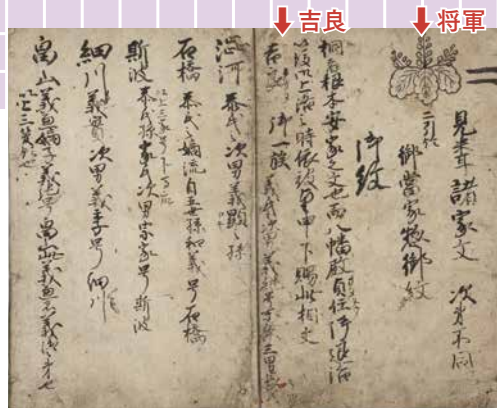
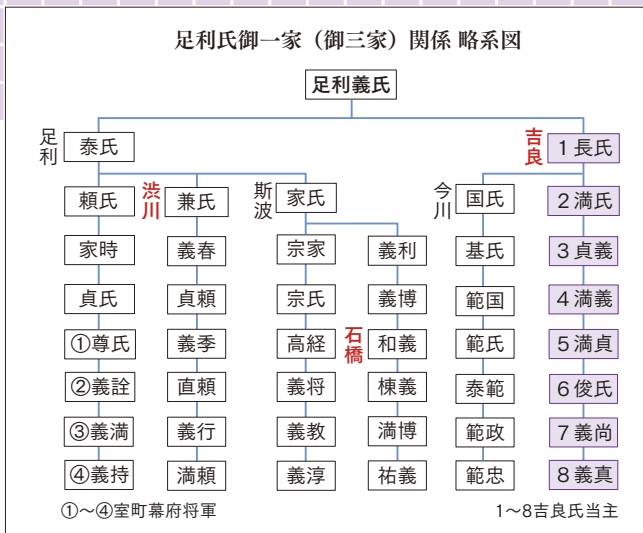
吉良義尚は1419年に浜松荘内に賀久留八幡宮（現賀久留神社、浜松市西区）を建立しています。また、この地域の曹洞宗の中心寺院であった普濟寺（浜松市中区）を保護しており、普濟寺では吉良俊氏・義尚・義真の法要の規則を定め、また吉良氏の位牌を安置していました。このほかにも義尚は浜松荘内の授竜庵（現寿量院、浜松市中区）という寺院を保護しています。浜松荘は吉良氏にとって最も重要な経済基盤でしたので、富永氏、大河内氏などの重臣を代官として派遣し、その経営に当たりました。

吉良貞家の活躍

- 一番 刑部大輔義季（渋川義季）
- 二番 兵部大輔経家（岩松経家）
- 三番 宮内大輔貞家（吉良貞家）
- 四番 右馬権助（一色頼行）
- 五番 丹波左近将監範家（石塔範家）
- 六番 中務大輔満儀（吉良満義）

↑ 関東廂番の筆頭
元弘4年（1334）。『建武記』より作成

吉良貞家は、各種系図によれば三河吉良氏初代長氏の兄弟である義継の子孫にあたる人物です。貞家の歴史上の初見は、1331年の鎌倉幕府上洛軍の編制に三河軍を率いる大将となっていたことで、その後の建武の新政では、鎌倉で後醍醐天皇の皇子成良親王を宿直しながら守る関東廂番の第三番組の筆頭になっています。ちなみに吉良満義は第六番組の筆頭です。貞家は室町幕府では、因幡国（鳥取県東部）守護、但馬国（兵庫県北部）守護、引付頭人を歴任し、1345年には奥州管領として奥州（東北全県）の地に下り、南朝などあらゆる敵を倒して足利一門の奥州管領として一時代を築きました。この貞家の子孫は、のちに武蔵国世田谷（東京都世田谷区）を本拠としたため、武蔵吉良氏とよばれることとなります。



↑『見聞諸家文（紋）』西尾市岩瀬文庫蔵
室町時代の武士諸家の家紋集。掲載順から吉良氏が将軍家と最も近い一族であることがわかります。

室町武家社会に君臨

足利御一家（御三家）の筆頭に

室町幕府を安定させ、将軍の権威を確立した足利義満の跡を継いで第4代将軍となった義持は、子の義量に将軍職を譲りますが、義量は1425年に後継者のないまま死去し、将軍家の直系が断絶します。6代将軍は義持の弟たちからくじ引きで選ばれましたが、幕府は将軍家を維持するため、後継候補となる御一家（御三家）を創りました。足利一門の中の吉良氏、石橋氏、渋川氏の三氏で構成され、その共通点は、足利本家の「兄」の家系であること、鎌倉期に足利本家以外に名字が「足利」だったこと、足利氏の有力な分家として独自の勢力を誇ったことでした。

御一家の役割は将軍後継候補だけでなく、管領家として大きな力を誇った斯波氏や関東を支配した足利氏（鎌倉公方家）を将軍後継候補から遠ざける思惑もありました。15世紀半ばには御一家が確立していたとみられ、中でも筆頭吉良氏の権威は三職（斯波・細川・畠山の三管領家）を超え、将軍に次ぐものでした。

吉良荘における吉良氏（華蔵寺を保護する西条吉良氏）



↑⑩吉良義央が寄進した経蔵
華蔵寺（吉良町岡山）
市指定文化財。2012年撮影

西尾市吉良町岡山の片岡山華蔵寺は、1600年に吉良上野介義央の曾祖父義定がその父義安を開基として再興した寺で、義安以降最後の当主義周までの吉良氏歴代の墓が現存しています。吉良義尚は1409年に華蔵寺に一切経蔵を建てるのに際し、重臣の巨海氏と大河内氏と共に特別に保護しています。華蔵寺は吉良荘東条にあります。西条吉良氏ゆかりの寺でありました。1700年に吉良義央は華蔵寺に経蔵を寄進し、鉄眼版一切経を納めていますが、これは先祖の義尚にならったものかもしれません。

なお、華蔵寺は実相寺（西尾市上町）の4代住職で、大寺院である京都東福寺の住職を務めた仏海禅師（一峰明一）が最期を遂げた寺でもあります。



④ 応仁の乱勃発地である上御霊神社の楼門と碑 (京都市上京区)

戦国の幕開けと吉良氏←応仁の乱と明応の政変

1467年に起こった^{おうにん らん} 応仁の乱は、^{あしかがよしまさ} 將軍足利義政の後継者問題、^{かんれいはいたけやまし かとく} 管領畠山氏の家督争いや^{ほそかわかつもと やまなもちとよ そうぜん} 細川勝元と山名持豊(宗全)の権力闘争などが入り乱れ、京都を中心に11年にもわたって繰り広げられました。西条吉良氏は東軍細川方、東条吉良氏は西軍山名方として

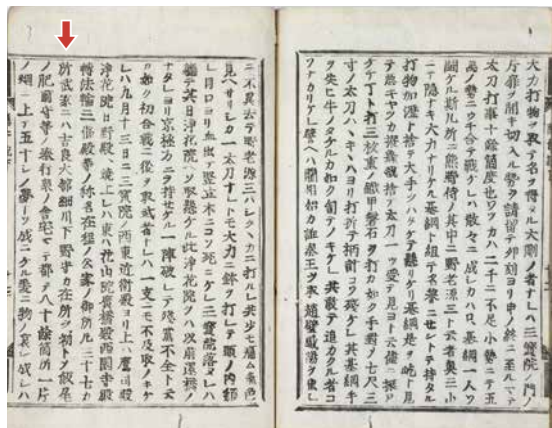
互いに争ったと伝わりますが、これはかなり後世に書かれた『三河軍記』などによるもので、事実はよくわかりません。この時期の吉良氏の動向としては、大乱当初に吉良(東条)^{よしふじ} 義藤は、^{せんとうごしよ} 仙洞御所(退位した天皇の邸宅)を^{けいご} 警固したこと、京都の吉良(西条)^{よしざね} 義真邸が戦火で焼失したことなど、断片的な記録しか残っていません。応仁の乱によって室町幕府の支配体制は弱体化していきました。

1493年、管領細川政元が^{あしかがよしき} 將軍足利義材(のち^{よしただ よしたね} 義尹、義植と改名)を退け、新將軍として^{あしかがよしとお よしたか よしずみ} 足利義暹(のち^{よしたか よしずみ} 義高、義澄と改名)を立てた事件、いわゆる^{めいおう} 明応の政変でも吉良氏がどうかかわったかは不明です。1508年、足利義尹が將軍に復帰した際には吉良(西条)^{よしもと} 義元(義真の子) ^{かりごしよ} 邸を^{かりごしよ} 仮御所とするなど吉良氏は義尹派として活動しました。

この二つの歴史的な大事件により幕府・將軍の権威はしだいに失われました。御一家(御三家)として將軍に次ぐ高い地位にあった吉良氏の権威も同様に失われていきます。こうして戦国時代の幕が開かれました。



⑤ 西陣の碑 (京都市上京区) 応仁の乱西軍の陣所跡



⑥ 『応仁記』 西尾市岩瀬文庫蔵



①引間城（曳馬城）跡（浜松市中区）
現在は東照宮となっています。



②曳馬城跡の碑

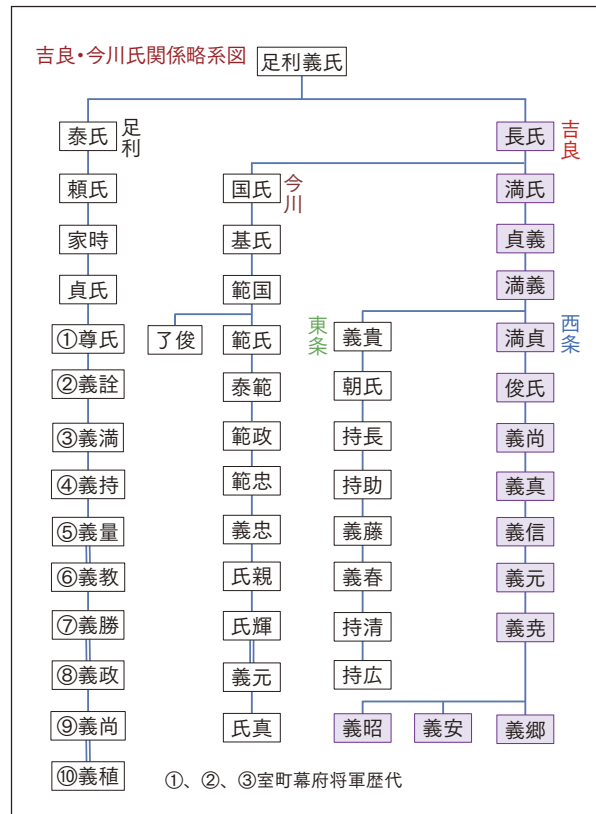
吉良氏の浜松荘支配

三河で苦悩する吉良義信

足利尊氏が京の都に幕府を開いたため、有力守護などは京都に居住します。吉良氏も同様に京都に屋敷がありました。1481年に亡くなった吉良義真（義尚の子）の跡を継いだのは子の義信でした。義信はすぐに室町幕府に出仕しますが、1492年頃から京都での活動が確認できなくなります。義信に代わって京都で活動していたのは子の義元でした。この頃、多くの有力武士がそうであったように、吉良氏も在京する者と領地経営を行う者とがあり、一族で連携していました。

遠江国（静岡県西部）の守護は、14世紀半ばから今川氏が務めていましたが、15世紀初頭に斯波氏に交代しました。これは幕府有力者（管領）としての権力によるものでした。遠江に絶大な経済基盤である浜松荘を領する吉良氏は守護斯波氏と協調することにより荘園経営を行い、富永氏、大河内氏などの重臣を代官として派遣しました。

応仁の乱以降、駿河（静岡県中央部）の今川氏はたびたび遠江を攻めますが、1501年になると今川氏親（義元の父）が本格的に侵攻します。守護斯波氏と結んだ浜松荘代官大河内氏は拠点である引間城を中心に戦闘を繰り広げます。そのため領地経営に携わる吉良義信は、三河吉良荘にあって日々苦悩することになります。





①⑦現在の無量寿寺本堂（平坂町）真宗大谷派



①⑧平坂移転前の無量寿寺推定地（羽塚町）
この辺りの地名は坊山といい、無量寿寺があったことをうかがわせます。

京都を離れる
吉良義元

吉良義元は、1493年の明応の政変^{しっきやく}で失脚した足利義尹^{あしかがよしただ}（義材より改名、のちの義植^{よしたね}）が1508年に将軍に復帰してからは幕府内で安定した地位を確保しますが、今川氏が遠江に侵攻すると事情が変わってきます。義元は1501年から1504年頃と1513年の

二度、三河^{げこく}に下国していることがわかっています。

吉良義信が今の平坂町にある無量寿寺^{むりょうじゅじ}に出した書状によると、義元が三河に帰るにあたり無量寿寺が船^{ちゆうたつ}を調達したことに對し、感謝の意を述べています。無量寿寺はこの頃羽塚にあり、寺の南は入り江で船がつけられたのかもしれませんが。

遠江では守護斯波氏と結んだ浜松莊代官の大河内氏（吉良氏家臣）が今川氏と戦闘を繰り返しますが、1513年には今川氏に捕らえられた大河内氏が義信^{こんがん}の懇願で死罪を免れたようです。そして、この頃より京都での義元の活動が確認できなくなります。吉良氏は京都にいることをあきらめ、領地経営に専念するようになったようです。

遠江をめぐる争いは、1517年の今川氏の勝利で終了し、大河内氏らはことごとく処罰^{しょ}され、浜松莊は吉良氏から離れることになりました。この前年、義信は子の義元ではなく孫^{よしたか}の義堯に家督を譲っているため、義元はそれ以前に死去したようです。



①⑨法蔵寺（浜松市南区）浄土宗鎮西派
吉良義堯の妻が創建にかかわっています。



①⑩吉良義堯夫妻の墓 法蔵寺



④ ⑨ 今川義元の首塚 東向寺（駒場町）
桶狭間の戦いで討ち死にした義元は、当時の住職が伯父にあたることから配下の戦死者とともにこの地に葬られたと伝えられます。



④ 太原崇孚（雪斎）の墓 臨濟寺（静岡市葵区）
臨濟寺は今川氏の菩提寺で、今川氏輝（義元の兄）などの墓があります。

吉良荘で迎えた戦国時代

今川義元と二度の敵対

1540年になると尾張の織田信秀（信長の父）が三河に侵攻します。同じ年、西尾城外で織田氏との戦闘があり、吉良義郷（義堯の子）が討ち死にしたようです。続いて1546年頃には、駿河の今川氏が三河に侵攻し、西三河の平野部では織田氏と今川氏という二大勢力がぶつかることになりました。

吉良氏を継いだ義安（義堯の子、義郷の弟）は織田氏の主君にあたる尾張国守護の斯波氏の娘を妻とし、織田氏と手を結ぶこととなります。その結果、義安は1549年に今川義元の軍師太原崇孚（雪斎）に攻められますが、すぐに降伏して許されたようです。ところが、1555年になって義安は再び今川氏に叛きます。織田方の水野氏の軍勢を西尾城に入れて対抗しますが、結局敗れました。その後、1557年に西尾城へは今川氏により三浦氏と牧野氏が城番として置かれました。こうして、吉良氏は本拠である吉良荘西条を失ってしまったのです。また、吉良氏当主の義安は今川氏の領内である藪田（静岡県藤枝市）に移され、今川氏の監視下に置かれました。

この後、今川義元により吉良氏の当主とされ、東条城を任されたのが吉良義昭（義堯の子、義安の弟）です。こうして、今川氏の支配下となった吉良氏ですが、1560年5月、桶狭間の戦いで義元が織田信長と戦って討ち死にすると、三河の情勢は一変することになりました。



④ 麻疹地蔵（静岡県藤枝市下藪田）
吉良義安の墓と伝えられます。



④ 桶狭間古戦場伝説地（豊明市） 国指定史跡



⑩ 東条城跡 (吉良町駿馬)



⑪ 藤波畷古戦場 (吉良町寺嶋・瀬戸)

徳川家康と
戦って没落

桶狭間の戦いの後、今川氏の武将であった松平元康（徳川家康）は、しだいに今川氏から離れ、自ら三河統一を進めます。今川方の吉良義昭も当然家康の攻撃対象とされ、1561年になると、かつて吉良氏に属した松井忠次が津平（吉良町津平）に、本多広

孝が小牧（吉良町小牧）に砦を築いて、義昭が立てこもる東条城を攻める体制を整えます。

そして同年9月13日、東条城の西の藤波畷一帯で松平方と吉良方との戦いが行われました。吉良方では室城主であった25歳の富永伴五郎忠元を中心に戦闘を繰り広げますが、多勢の松平方にはかなわず伴五郎は討ち死にし、義昭は東条城を退去することになりました。なお、伴五郎が討ち死にした地には地蔵が祀られ、現在でも伴五郎地蔵とよばれ、地元の人々に守られています。

1563年の冬になると、西三河では真宗寺院がいっせいに蜂起し、家康を苦しめます。いわゆる三河一向一揆が起こりますが、吉良義昭はこれを好機として家康に反抗します。一時東条城を奪い返したようですが、翌1564年になると一向一揆は鎮められ、義昭も東条城を失って三河国から退去しました。ここに足利一門の名族三河吉良氏は没落しました。



⑫ 富永伴五郎一族討死の地 (吉良町寺嶋)



⑬ 伴五郎地蔵 (吉良町寺嶋)



⑳ 吉良義安の木像 華藏寺蔵
市指定文化財



㉑ 吉良義定の木像 華藏寺蔵
市指定文化財

吉良家の再興と赤穂事件

高家吉良家として再興

今川氏によって吉良荘から藪田（静岡県藤枝市）に移された吉良義安は、1569年に亡くなったようですが、藪田の地で一男一女をもうけます。一男はのちの吉良義定で、その母親は俊継尼といいい松平信忠（家康の曾祖父）の娘とも松平清康（家康の祖父）の娘ともいわれています。この松平（徳川）氏との縁戚関係から吉良家は江戸幕府により再興されたと伝えられますが、事実はわかっていません。

吉良家が歴史上再び現れるのは、吉良義弥（義定の子）が幕府において儀式や典礼を職務として取り扱う「高家」として起用されるときからです。義弥の高家としての活動は、1610年頃からみられますが、吉良家が幕府から重要視されたのは、足利将軍家に近い名族であること、「吉良流」という礼法（礼儀作法）を伝えていたこと、京都の公家とのつながりがあったことでした。なかでも吉良流礼法については、戦国時代末期までに西条吉良氏が完成させていたことが知られており、朝廷との関係をスムーズに行うため、幕府はその存在を最も重んじました。

こうして、いったん没落した足利一門の名族吉良氏でしたが、吉良流礼法を守り続けていたため、高家吉良家として再興したのです。



㉒ 俊継尼の墓 堯雲寺
（吉良町岡山）



㉓ 吉良流礼法（婚礼の次第） 西尾市教育委員会蔵
美濃加納藩の礼法家に伝わった礼法書。婚礼の宴席の献立、席次などを記したものの。



① 吉良邸跡 本所松坂町公園（東京都墨田区）



② 吉良義周墓 法華寺（長野県諏訪市）
諏訪市指定史跡

赤穂事件で 滅亡

吉良義弥のときに高家に登用された吉良家は、その後義冬（義弥の子）、義央（義冬の子）と受け継がれて高家筆頭に上り詰め、その地位を確立します。

義央は米沢藩 30 万石の大大名上杉家から妻（三姫・富子）を迎えますが、藩主である妻の兄が急死したため自分の息子（のちの上杉綱憲）を上杉家の跡取りとして養子に出します。その後、吉良家に世継ぎがなくなったため、今度は綱憲の子（のちの吉良義周）を吉良家の跡取りに迎えます。こうして吉良家と上杉家は三重の縁で結ばれ、義央は黄金堤を築くなどの善政をつくし、人生もようやく終わりに近づこうとしたとき、運命はだしぬけに逆転します。

1701 年、赤穂藩主浅野内匠頭長矩は勅使（天皇の使者）の饗応役（接待役）を命じられ、その指導を義央が行いました。3月14日、浅野が江戸城大廊下で義央を切り付ける事件が発生（松の廊下刃傷事件）。幸い義央は一命を取り留めましたが、その日は、将軍が天皇の使者にお礼を伝える重要な日で、怒った将軍徳川綱吉は浅野に即日切腹を命じ、赤穂藩を取りつぶしてしまいました。一方、義央に対しては手向かいしなかったとしてお咎めなしであったので、世間の評判は幕府の対応が不公平だと浅野に同情的でした。なお、浅野が大罪である殿中で刃傷事件を起こした理由は今もわかっていません。

赤穂側では大石内蔵助をはじめ 47 人といわれる浪人が、翌 1702 年 12 月 14 日深夜、本所（東京都墨田区）の吉良邸を襲い、義央の首を取るという討ち入り事件を引き起こしました。歴史上この二つの事件を合わせて「赤穂事件」とよんでいます。（近年では「元禄赤穂事件」ともよばれます。）

討ち入り事件に対して幕府は、赤穂浪人を切腹に処する一方、吉良家に対しても領地取り上げの上、当主義周を諏訪（長野県諏訪市）への流罪に処しました。義周は討ち入り当夜、応戦して重傷を負いましたが、既に隠居していた義央を討ち取られたことが「仕方届き」として罪に問われたのです。失意の中、義周は諏訪流罪の 3 年後、21 歳の若さでこの世を去り、ここに三河吉良氏の嫡流（本家）は滅亡したのです。私たちが暮らす西尾市にルーツをもつ吉良氏の歴史を、故郷の誇りとして後世に伝えていきたいものです。

◆吉良氏の歴代当主

歴代	実名	仮名	官途・受領名	法名
1	長氏	五郎	左衛門尉、上総介	新御堂殿
2	満氏	三郎	左衛門尉、上総介	開山檀那自省
3	貞義	弥太郎	上総介	実相寺殿象先省観
4	満義	三郎	中務大輔、右兵衛佐、左京大夫、右兵衛督	寂光寺殿松岩省猷
5	満貞	三郎	治部大輔、左馬頭、左兵衛佐	道興寺殿中室省堅
6	俊氏	三郎	左兵衛佐	竜門寺殿宝山常珍
7	義尚	三郎	左兵衛佐	正法院殿義山常重
8	義真	三郎	治部大輔、左兵衛佐	拈花院殿道山正弘
9	義信	三郎	治部大輔、左兵衛佐	常楽院殿跋山是棟
10	義元	三郎	治部大輔	少林院殿月巖源光
11	義堯	三郎		建福寺殿通山是玄
12	義郷	不明		宝珠院殿奇山敏勝
13	義安	三郎	上野介	華蔵寺殿円山成公
14	義昭	不明		不明
近1	義定	三郎	上野介	長松寺殿興山中公
近2	義弥	三郎	侍従、左兵衛督、上野介、左少将	後華蔵寺殿法山猷公
近3	義冬	三郎	侍従、左京大夫、若狭守、左少将	大雄寺殿要山玄公
近4	義央	三郎	侍従、上野介、左少将	靈性寺殿実山相公
近5	義周	左兵衛		室燈院殿岱嶽徹宗

※義昭は今川氏より東条城を宛がわれましたが、西条吉良氏流として記載しました。

※義定以下は吉良家を再興した近世（高家）吉良家の代数を記載しました。

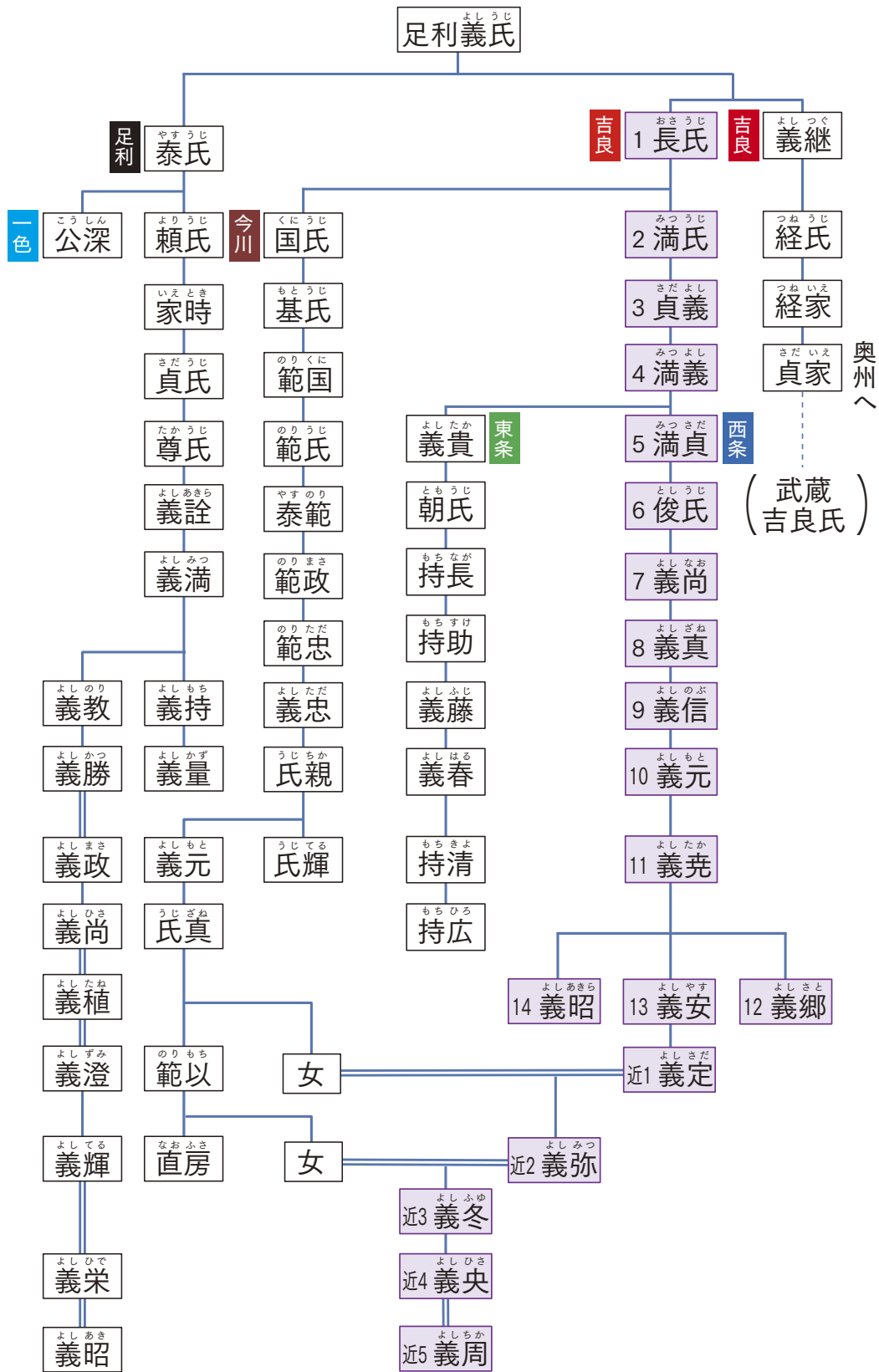


⑰吉良家墓所 華蔵寺（吉良町岡山）



⑱吉良義央の木像 華蔵寺蔵 県指定文化財

◆吉良氏関係略系図



※吉良荘内今川の地（現西尾市今川町）を発祥とする今川氏は吉良氏の分家ですが、1549年と1555年の2度、西尾城の吉良氏を攻撃しました。しかし、江戸時代になると両家とも江戸幕府の高家として活躍し、2度の姻戚関係を結んでいます。

- ① 西尾城址の碑
- ② 鶴ヶ崎天満宮
- ③ 本成大姉の墓（長寿尼寺跡）
- ④ 御剣八幡宮
- ⑤ 聖一国師の碑（実相寺）
- ⑥ 応通禪師の墓
- ⑦ 実相寺全景
- ⑧ 今川氏発祥の地
- ⑨ 願成寺
- ⑩ 一色氏発祥之地の碑
- ⑪ 康全寺
- ⑫ 実相寺釈迦三尊像
- ⑬ 東条吉良氏墓所（花岳寺）
- ⑭ 竜門寺跡
- ⑮ 今川了俊の供養塔（今川氏発祥の地）
- ⑯ 吉良義央が寄進した経蔵（華蔵寺）
- ⑰ 現在の無量寿寺本堂
- ⑱ 平坂移転前の無量寿寺推定地
- ⑲ 伝今川義元的首塚（東向寺）
- ⑳ 東条城跡
- ㉑ 藤波暇古戦場
- ㉒ 富永伴五郎一族討死の地
- ㉓ 伴五郎地蔵
- ㉔ 吉良義安の木像（華蔵寺）
- ㉕ 吉良義定の木像（華蔵寺）
- ㉖ 俊継尼の墓（堯雲寺）
- ㉗ 吉良家墓所（華蔵寺）
- ㉘ 吉良義央の木像（華蔵寺）

凡例

- 国道
- 主要地方道
- 新幹線
- JR線
- 私鉄線
- 航路
- 信号機
- 市役所
- 支所
- 寺院
- 神社
- 小中高校
- 郵便局
- 病院
- 城跡
- 温泉
- 道の駅
- 主な観光地
- 主な施設
- 主な交差点



写真掲載した市内史跡等案内地図



◆吉良氏略年表

時代	年代	こと が ら
鎌倉	1189	足利義氏誕生
	1211	初代足利（吉良）長氏誕生
	1221	承久の乱。足利義氏が三河国守護・吉良荘地頭に義氏が西条城・東条城を築く？
	1228	このころから長氏が鎌倉幕府に出仕
	1243	これ以降鎌倉での長氏の活動が見いだせなくなる
	1251	長氏が鶴ヶ崎天満宮を造営？
	1254	義氏死去（享年 66）
	1271	2代足利（吉良）満氏が実相寺を創建
	1275	このころ満氏が越前国守護に
	1285	霜月騒動。満氏の嫡子貞氏が討たれる
	1290	長氏死去（享年 80）
	1326	5代吉良満貞誕生
	1331	満氏が願成寺を開創？
	1333	3代足利（吉良）貞義が足利尊氏に鎌倉討幕を勧める 鎌倉幕府が滅びる
室町	1336	建武式目の制定。室町幕府成立
	1338	足利尊氏が征夷大將軍になる
	1341	このころまでに貞義が浜松荘を領有
	1343	貞義死去。このころまでに名字が足利から吉良に
	1345	天龍寺供養の随兵に満貞が加わる
	1350	観応の擾乱。4代吉良満義が足利尊氏・高師直方、満貞が足利直義（尊氏弟）方に
	1356	満義死去。東条吉良氏の分立？
	1360	このころ満貞が幕府（北朝）に帰順
	1362	満貞が実相寺に釈迦三尊像を造立
	1363	満貞が室町幕府の要職である引付頭人に
	1384	満貞死去（享年 59）
	1391	6代吉良俊氏が引付頭人に
	1392	相国寺供養の随兵に俊氏が加わる
	1409	7代吉良義尚が三河華藏寺を保護
1419	義尚が浜松荘に賀久留八幡宮（現賀久留神社）を造立	
1440	このころ吉良氏が足利氏御一家（御三家）筆頭に	
1465	8代吉良義真が京都の屋敷で盛大な犬追物を催す	
戦国	1467	応仁・文明の乱（～ 1477 年）
	1481	義真死去（享年 60 余）。9代吉良義信が家督を継ぐ
	1493	明応の政変
	1508	明応の政変で失脚した足利義尹（義植）が将軍に復帰。 10代吉良義元邸が仮御所に
	1511	将軍義尹（義植）京都を出る。義元がこれに従い、吉良邸の仮御所は放火される
	1516	義信家督を11代吉良義堯に譲る。義堯父義元はこれ以前に死去
1517	吉良氏が浜松荘の領有権を失う	

時代	年代	こと が ら
室 町 戦 国	1520	～ 1530 年の間に義堯が今川氏親の娘（義元姉）と結婚
	1523	満義に大明神の神号が授与される
	1536	13 代吉良義安誕生
	1540	12 代吉良義郷が西尾城で討死？
	1549	吉良荘が今川氏に攻められ、義安は矢文で降伏を迫られる
	1555	西尾城が今川氏に攻められる。義安が 1557 年までに駿河国藪田に幽閉される
	1557	西尾城に今川氏の在番が置かれ、吉良氏は本領吉良荘西条を失う
	1560	織田方の兵火で実相寺が焼失 桶狭間の戦い。今川義元死去（享年 42）
	1561	藤波岬の戦い。14 代吉良義昭が東条城で松平元康（のちの徳川家康）に敗戦
	1563	～ 1564 年、三河一向一揆
	1564	松平家康（徳川家康）が義昭を再び破る。吉良氏没落 近世吉良氏初代吉良義定誕生
	1569	義安死去（享年 34）
1573	室町幕府が滅びる	
安 土 桃 山	1586	2 代吉良義弥誕生
	1590	徳川家康が関東に移封。三河武士は関東へ移る
	1600	関ヶ原の戦い 義定が華蔵寺を再興
江 戸	1603	徳川家康が征夷大將軍になる。江戸幕府成立
	1607	3 代吉良義冬誕生
	1610	このころ義弥が高家として活動を開始
	1627	義定死去（享年 64）
	1641	4 代吉良義央誕生
	1643	義弥死去（享年 58）
	1663	義央長男三郎（のちの上杉綱憲）誕生
	1664	米沢藩 3 代藩主上杉綱勝（義央妻富子の兄）急死。 義央長男三郎が上杉家の養子に
	1668	義冬死去（享年 62）
	1677	義央初めて吉良荘を訪れる
	1678	義央二男三郎誕生
	1685	義央二男三郎死去（享年 8）
	1686	義央が黄金堤を築く？ 5 代吉良義周（上杉綱憲二男）誕生
	1688	義央が富好新田を開発
	1701	義央が江戸城大廊下で赤穂藩主浅野長矩に切られる
1702	義央が赤穂浪人に襲撃され殺される（享年 62）	
1703	義周が信州諏訪に流罪	
1706	義周死去（享年 21）。三河吉良氏嫡流断絶	

※地元の伝承など同時代史料で確認できないものは、「？」を付しました。

※享年がわかる人物については、享年（数え年）を付しました。

【「吉良氏の歴史」主要参考文献】

<自治体史>

- 『愛知県史 通史編 2 中世 1』(2018 年)
『愛知県史 通史編 3 中世 2・織豊』(2018 年)
『吉良家日記 吉良町史別冊資料』(西尾市、2013 年)
『吉良町史 原始・古代・中世前期』(1996 年)
『吉良町史 中世後期・近世』(1999 年)
『吉良の歴史』(吉良町、2004 年)
『吉良の人物史』(吉良町、2008 年)
『新編安城市史 1 通史編 原始・古代・中世』(2007 年)
『新編岡崎市史 中世 2』(1989 年)
『新編西尾市史 資料編 1 考古』(2019 年)
『新編西尾市史 資料編 2 古代・中世』(2020 年)
『西尾市史 2 古代・中世・近世上』(1974 年)
『西尾城シンポジウム 2 戦国時代の西尾城』(西尾市教育委員会、2016 年)
『西尾城シンポジウム 3 戦国時代の西尾城～吉良氏をめぐる在地領主』(西尾市教育委員会、2017 年)
『西尾の文化財散歩』(西尾市教育委員会、1983 年)

<個人著書・論文(自治体史含)>

- 青木昭博・小林輝久彦『創立 90 周年記念 米沢信用金庫叢書 6 上杉と吉良から見た赤穂事件』(米沢信用金庫、2017 年)
有光有學『人物叢書 今川義元』(吉川弘文館、2008 年)
大石泰史編『今川氏年表』(高志書院、2017 年)
大石泰史『今川氏滅亡』(角川選書、2018 年)
大嶋聖子「吉良氏の高家登用」(『戦国史研究』45、2003 年)
大嶋聖子「近世初頭江戸幕府における三河吉良氏の位置」(『愛知県史研究』12、2008 年)
大塚勲『今川氏と遠江・駿河の中世』(岩田書院、2008 年)
小川信『足利一門守護発展史の研究』(吉川弘文館、1980 年)
小川雄「桶狭間敗戦以降の三河の情勢と『今川・武田同盟』」(大石泰史編『今川史研究の最前線』、洋泉社歴史新書 y71、2017 年)
荻野三七彦『関東武士叢書 4 吉良氏の研究』(名著出版、1975 年)
小和田哲男『ミネルヴァ日本評伝選 今川義元』(ミネルヴァ書房、2004 年)
小和田哲男『中世武士選書 25 駿河今川氏 10 代一戦国大名への発展の軌跡一』(戎光祥出版、2015 年)
亀田俊和『観応の擾乱』(中公新書、2017 年)
川添昭二『人物叢書 今川了俊』(吉川弘文館、1964 年)
北原正夫「室町期三河吉良氏の一研究」(『愛知教育大学歴史学会歴史研究』27・28、1983 年)

- 北村和宏「三河吉良氏の断絶と再興」(義周公没後300年記念事業実行委員会『義周公没後300年記念シンポジウム資料集 吉良上野介義央と義周』、2006年)
- 木下聡『中世武家官位の研究』(吉川弘文館、2011年)
- 呉座勇一『陰謀の日本中世史』(角川新書、2018年)
- 小林輝久彦「天文・弘治年間の三河吉良氏」(『安城市歴史博物館研究紀要』19、2012年)
- 小林輝久彦「江戸前期に成立した二本の三河吉良氏の系図について」(『新編西尾市史研究』5、2019年)
- 坂井孝一『承久の乱』(中公新書、2018年)
- 佐藤進一『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』(東京大学出版会、1971年)
- 佐藤進一『日本の歴史9 南北朝の動乱』(中公文庫、1974年)
- 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究 下』(東京大学出版会、1988年)
- 清水敏之「吉良義信と吉良義元」(『新編西尾市史研究』5、2019年)
- 田中誠「田中家文書における系図の伝来について—「清和源氏吉良・荒川系図」を中心に—」(枚方市教育委員会・公益財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方の鑄物師2—古文書編—』、2014年)
- 谷口雄太「吉良流礼法とその継承者たち—東京大学総合図書館蔵『吉良流四卷書』から見た—」(『東京大学日本史学研究室紀要』14、2010年)
- 谷口雄太「室町期在京領主吉良氏と遠江国浜松庄」(『日本研究』54、2017年)
- 谷口雄太『中世足利氏の血統と権威』(吉川弘文館、2019年)
- 平野明夫『三河松平一族』(新人物往来社、2002年)
- 平野明夫「永禄6年・同7年の家康の戦い—三河一向一揆の過程—」(戦国史研究会編『戦国期政治史論集 西国編』、岩田書院、2017年)
- 福島金治『安達泰盛と鎌倉幕府—霜月騒動とその周辺』(有隣新書、2006年)
- 本多隆成『定本徳川家康』(吉川弘文館、2010年)
- 松島周一「吉良貞家と南北朝初期の尾張・三河」(『安城市史研究』7、2006年)
- 松島周一「室町初期の吉良氏—貞義から満貞へ—」(『愛知県史研究』18、2014年)
- 松島周一『鎌倉時代の足利氏と三河』(同成社、2016年)
- 村岡幹生「天文年間三河における吉良一族の動向」(『安城市史研究』9、2008年)
- 村岡幹生「織田信秀岡崎攻落考証」(『中京大学文学会論叢』1、2015年)
- 森田香司「今川氏親と文亀・永正の争乱」(静岡県地域史研究会編『戦国期静岡の研究』、清文堂、2001年)
- 山田邦明『日本中世の歴史5 室町の平和』(吉川弘文館、2009年)
- 吉井功兒『建武政権期の国司と守護』(近代文藝社、1993年)
- 吉井功兒『中世政治史残篇』(トーキ、2000年)